シーワールドのアニマル達

●ニシキエビ

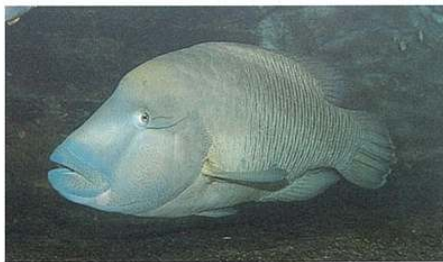
ニシキエビは、熱帯域に住むイセエビの仲間で世界最大の種類です。体が大きく色彩や模様が美しいことから、額縁に入った飾り物として見た方も多いのではないでしょうか？　体長50cm、体重6kgの巨大なニシキエビは、国営沖縄記念公園水族館から送られてきました。発泡スチロールの中で海藻のアオサに包まれて空輸されたきたニシキエビは、シーワールドに着いたときには長旅でぐったりとしたように見えましたが、ガラス水槽に入れたとたん尾をバタバタと動かして元気一杯の姿を見せてくれました。これだけ大きくなると姿形が立派だけでなく尾のあおる力も強烈で、ニシキエビが落ち着くようにと水槽の底に敷いたこぶし大の石を跳ね飛ばし、ガラスが割れてしまわないかと心配したほどでした。現在は、エコ・アクアローム内の水槽での仮住まいですがトロピカルアイランドが完成するとサンゴ礁にぽっかりと開く洞窟「幻想の岩場」へ引っ越す予定で、その大きさと美しさはご覧になったお客様を魅了してくれることでしょう。

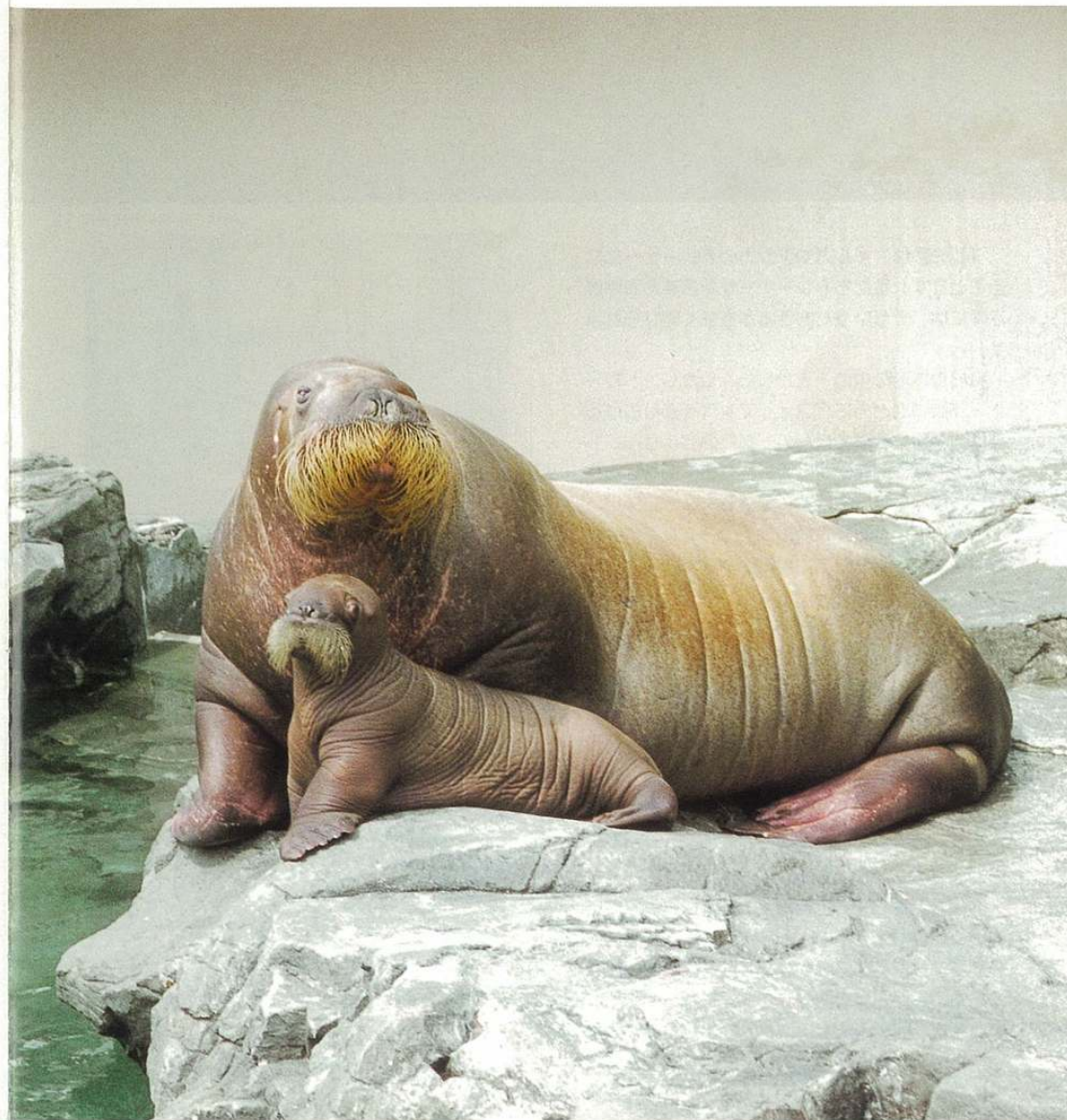
（大澤）

▲ニシキエビ *Panulirus ornatus*

●メガネモチノウオ

「ナポレオンフィッシュ」の名は成魚の額がこぶ状につき出し、フランスの古い軍隊帽を思わせることからつけられたニックネームです。標準和名は「メガネモチノウオ」といい、眼の後ろに2本の黒い線があることが、この名の由来です。ベラの仲間で、2m近くまで成長しサンゴ礁の岩かげなどを住みかとしています。大きな体をゆっくりと動かして泳ぐ姿は、まさにナポレオンの風格を感じさせてくれます。当館の個体は、体長80cmとまだ幼魚ですがディスカバリーガイダンスで裏方見学に来られるお客様の前で口を開けてエサをねだることがよくあり、人気者です。エサは、イカや魚の切身、エビなどなんでも好き嫌いなく食べます。ゆっくりとした動作のため活発に泳ぎまわる他のサカナ達の中で、エサをあげるのは少し気を使います。また、昼と夜の生活がはっきりしていて、夜になるといつも決まった岩かげで休息をしています。朝、水槽の掃除で係員が近づいても、まだ眠りから覚めないのかあまり気にせず、しぶしぶ移動したかと思うと、すぐに同じ場所に戻って横たわっています。このナポレオンフィッシュは、まもなく完成する新しい施設「トロピカルアイランド」でどんな姿を見せてくれるのか楽しみです。

（成田）

▲メガネモチノウオ *Cheilinus undulatus*

さかまた No.55　（禁無断転載）

編集・発行　鴨川シーワールド

〒296-0041 千葉県鴨川市東町 1464－18

☎(0470)92－2121

http://www.mitsuikanko.co.jp

発行日　平成12年7月

さかまた

鴨川シーワールド　NO. 55

トレーナーの一日(いちにち)

▲「イルカの海」の潜水掃除

「私の夢は、イルカやアシカのトレーナーになることです」私たちトレーナーが所属する海獣展示課には、そういったお手紙が数多く寄せられます。

私自身、その中の一人でした。しかし、トレーナーが動物とともにパフォーマンスを繰り広げる姿は、一日の仕事のほんの一部に過ぎません。トレーナーは、同時に飼育係としての役割もはたさなければならないのです。そこで、なってみないとわからなかったイルカやアシカのトレーナーの一日をパフォーマンスの裏舞台や様々な仕事をまじえて紹介します。

パフォーマンスの始まる前

朝、作業服に着替えるとまず動物の健康状態を調べるためにそれぞれの飼育施設（プールや飼育舎）を見て回ります。アシカのトレーナーが担当するアシカやアザラシたちの多くは、夜間は陸に上って眠ります。トイレの場所が決まっていませんので、朝一番の飼育舎は、開館中のきれいな状態とはうってかわってものすごい有様です。そんな飼育舎を毎日掃除しながら、「よし、今日もいいウンチをしているな」「あれ、今日はお腹の調子があまり良くないのかな？」など動物の健康状態を知る手かがりを得るのです。これらの作業を終えると、調餌（エサの準備）が始まります。ホッケやサバなどの魚を動物に合わせた大きさに切り、お腹に釣り針などが混っていないか調べた後、床一面にならんだそれぞれ名前がついているバケツに振り分けて、重さを計って出来上がりです。朝の調餌室は活気があふれていてとてもにぎやかです。動物たちの朝食後は、観察窓を拭いたり、マイクなどの放送器材のチェックなどの作業を行い、いよいよパフォーマンスに向けて衣装に着替えます。

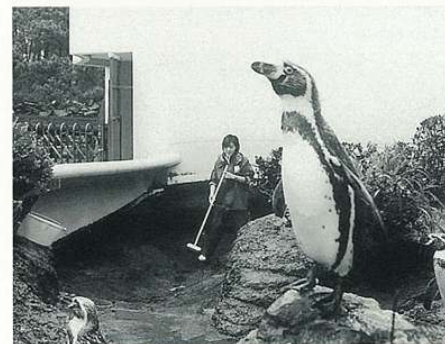
▲朝の調餌作業は時間とのたたかい

▲さあ、食事の時間ですよ

お客様の前へ

空高く飛び上がったり、尾ビレだけで器用に立ち泳ぎをしたり、みんなそろってのコーラスを響かせてくれるイルカパフォーマンス。そしてほのぼの家族を体いっぱいで表現し、クライマックスでは可愛いとはほど遠い怪しげな笑顔で締めくくるアシカパフォーマンス。しかし、全てのパフォーマンスが上手くいくとは限りません。動物との息が合わなかったり、動物の気持ちがわからず、動物にそっぽを向かれてしまうこともあります。それでも諦めずに「今日はここがダメだったから明日はこうしてみよう」と考えることで、少しずつトレーナーとしての技術を身につけていきます。

プールをきれいに

飼育施設のチェックも欠かすことのできない大切な仕事です。水族館の動物が生きていく上で欠かせない水には特に気を使います。一日３回各施設の水温を測り、動物の生活環境に合わせて水温を調節します。「イルカの海」はウエットスーツを着てボンベを背負って潜水掃除を行いますし、「アシカ・アザラシの海」や「ペンギンの海」は、水を空(から)にしてプール全体の大掃除をします。

▲「ペンギンの海」の掃除

動物のトレーニング

このようにトレーナーと言っても、はじめから動物のトレーニングができるわけではありません。３年ほど様々な飼育業務をこなし、担当する動物の生活や行動を充分理解した上で、先輩トレーナーや先輩動物に教わりながらイルカやアシカのトレーニングを学んでゆくのです。

動物のトレーニングが終わると、その日の動物の状況を細かく日誌に記入し、次の日に使用するエサをマイナス20℃の大きな冷凍庫から取り出し、朝までに解凍するようにタイマーをセットします。こうしてトレーナーの一日の作業は終了しますが、静まりかえったステージではパフォーマンスの訓練に取り組む新米トレーナーの声が響いています。

▲アシカ？のトレーニング

トレーナーになるには

トレーナーと言う職業には特別な資格は必要ありません。高校を卒業して就職する人や大学で生物のことを学んで就職する人など様々ですが、希望者が多く狭き門です。イルカやアシカのトレーナーは体力や運動能力の他に、情熱が最も必要です。動物の様子がおかしいときは夜中でも駆けつけ看病しますが、毎日違う表情を見せてくれる野生動物とのつきあいは、とても魅力的でやりがいがあります。

トレーナーは、動物への愛情とお客様からの拍手に支えられているのだと思います。（井上陽）

トピックス

「トロピカルアイランド」オープンせまる

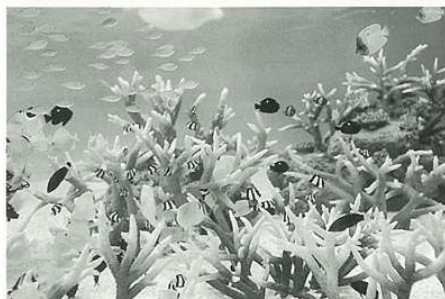
▲完成間近いトロピカルアイランド内部「南国の渚」

赤道直下に位置するキリバス共和国のサンゴ環礁「タラワ」「マキン」をモデルとした熱帯の海「トロピカルアイランド」は、7月22日のオープンをめざして建設工事が着々と進んでいます。展示予定の生物の大部分は、特設の飼育施設や予備水槽などで飼育されていますが、現在も初めて見るコーラルフィッシュが次々と輸送されてきていて、スタッフは受け入れに追われています。すでに飼育されている生物はカラフルな魚ばかりではなく、外洋性のサメやサンゴを住みかとするエビなどの小型生物、大人の太ももサイズの巨大ウツボなどがいて、飼育スタッフはこれら初めて飼育する種類にとまどうことも多いのですが、じっくり観察してみると様々な生活様式に興味はつきません。

「南の海の水中散歩」をテーマとしたトロピカルアイランド、どうぞご期待下さい。

（岡田）

▲モデルとなったキリバス共和国のサンゴ環礁

▲生物の輸送が続く

▲「エメラルドの入江」で泳ぐサンゴ礁の魚たち

新しい仲間

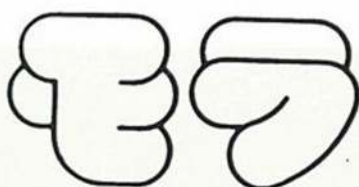
エトピリカがやってきた

▲ラッコと同居中

昨年10月1日、鴨川シーワールドにロシア・カムチャッカから新しい仲間「エトピリカ」30羽がやって来ました。エトピリカはアイヌ語で「美しいくちばし」という意味で、北太平洋に生息する全長約40cmの海鳥です。成鳥になると、その名のとおり夏にはくちばしが鮮やかなオレンジ色に変わり、目の上には黄色い飾り羽が生えます。搬入したエトピリカはまだ幼鳥でこれらの特長がはっきりしていませんが、少しずつ模様が現れています。搬入後1ヶ月間、1羽づつ巣箱に入れて餌付けをしましたが、今では係員にも慣れて近寄ってきては甘えた表情で餌を要求してきます。

現在、このエトピリカたちは同じ生活環境のラッコと生活しています。ラッコに追われて、あわてて陸に上がることもありましたが、今ではラッコが睡眠中に泳いだり潜水して餌を探すなどの姿を見ることができます。水中を飛ぶように羽ばたきながら泳ぐ姿に魅了され、ラッコプールの前で立ち止まっているお客さんをよく目にします。（小林）

▲エサをもらうエトピリカ（夏の模様が現れ始めている）

▲水中を飛ぶようにしてエサを探す

●ラビー2才の“ハッピーバースデー”

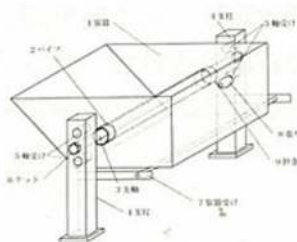
1月11日で２才の誕生日を迎えた子シャチのラビーは、体長3.5ｍ、体重740Kgに成長し、相変わらずおてんばぶりを発揮しています。誕生日には、ラビーの名付け親のお友達やタレントの山田邦子さんがお祝いに駆けつけてくれました。ラビ−はステージ上の大きなケーキや何人ものカメラマンに少し驚いたようです。多くのお客様から誕生日の歌をプレゼントしてもらったラビーは、お礼に覚えたばかりのジャンプを披露し、山田邦子さんへのキスのプレゼントも上手にできました。今では、ジャンプだけでなく色々な種目にチャレンジしています。

（山田千）

●イルカとのふれあいツアー

3月から団体観光客を対象として、イルカと一緒にふれあう「イルカとのふれ合いツアー」が始まり、今までに約300名が参加されました。プールの床を水深60cmに上げた「イルカの海」で、トップブーツを着用し、10人から15人のグループに分かれてイルカとのふれあいを楽しんでいただいています。イルカが近くにやってくると参加者からは歓声が上がり、「ツルツルしている」「かわいい目」「こっちに遊びに来て」など様々な感想をもらしていましたが、皆さんに共通することは笑顔になることで、あらためてイルカの持つ不思議なパワー？を感じさせられました。

（久下）

●造波装置実用新案登録

当館で考案し、現在エコ・アクアロームで使われている造波装置が今年２月に実用新案（登録　第3068514号）として登録されました。この造波装置は水槽の水を容器に送り、溜まった水が一瞬に水槽に落ち、その衝撃で波を起こす仕組みになっていて、形こそ違いますが日本庭園などで見られる「ししおどし」の原理を利用しています。この造波装置は、早速トロピカルアイランドでも活用され、砂浜に打ち寄せる波を演出しています。

経験的なものが多い水族館の技術は一般によく知られていませんでしたが、今回の登録で水族館の技術を見直していきたいと思っています。

（中坪）

●今年の干支　タツの展示

今年のお正月からエコ・アクアローム内で、「干支の生物、海の龍大集合!!」と題し、タツノオトシゴの展示を行っています。このコーナーでは房総に生息するタカクラタツやヨウジウオを始めオーストラリアに生息するポットベリーシーホース、サンゴ礁に生息するイバラタツやオオウミウマなど８種50尾のタツノオトシゴ類を展示しました。名前は良く知られるタツノオトシゴですが、ご覧いただいたお客様からは「かわいい」「アッ、これがタツノオトシゴだ」などの声がよく聞かれるほか、2000年をかたどった水槽をバックに記念写真を撮影される方も多く見うけられています。

（森）